

## 書評

種村和史著

### 『詩經解釋學の繼承と變容』

——北宋詩經學を中心に据えて——

大野圭介

富山大學

『詩經』は中國文學史の立場から見れば中國最古の詩集であるが、中國思想史の立場から見れば經書の一つでもある。前近代においては漢代の詩序・毛傳・鄭箋、唐代の『毛詩正義』に代表される「古注」、宋代の朱熹『詩集傳』に代表される「新注」などの諸注釋が現れたが、それは一貫して詩から政治思想や道徳を讀み取るうとするものであった。

近代に入り、フランスのグラネー『中國古代の祭禮と歌

謠』を嚆矢として『詩經』を純粹な文學作品として讀み解く研究が始まる。中國では聞一多が『古典新義』に民俗學的な新解釋を發表し、今日なお支持される説も多い。聞一多以後、古注や新注の道徳主義を排し、儒家思想の影響を受けない古代歌謠として『詩經』の原義を採る研究が『詩經』研究の主流となっている。

わが國でも松本雅明はその大著『詩經諸篇の成立に關する研究』で、詩における興は譬喩ではなく直感的・即興的な「氣分象徴」であるとし、「それを原初的なかたちにかえすことによつて、詩解における二千數百年の蒙を拂い<sup>①</sup>」と主張した。目加田誠も『詩經譯注』において古注や新注の道徳主義的解釋を「おかしな話」「迂曲の愚<sup>②</sup>」など一蹴している。歴代の諸注釋の解釋は、詩の正しい理解において拂いのけるべき邪魔物とされたのである。

その後は吉川幸次郎『詩經國風』上・下（一九五八年、岩波書店『岩波詩人選集』）や高田眞治『詩經』上・下（一九六六―一九六八年、集英社『漢詩大系』）のように古注や新注をもとにした比較的穩健な解釋を行う譯注も出ているもの

の、加納喜光『詩經』上・下（一九八二—一九八三年、學研『中國の古典』）、石川忠久『詩經』上・中・下（一九七七—二〇〇〇年、明治書院『新釋漢文大系』）白川靜『詩經國風』『詩經雅頌』（二〇〇四年、平凡社東洋文庫）など、舊來の道德主義・歴史主義的解釋を努めて排し、独自の視點を盛り込んだ譯注の方が今に至るまで主流を占めている。

また研究書も白川靜『詩經研究 通論篇』（一九八一年、朋友書店、家井眞『詩經』の原義的研究』（二〇〇四年、研文出版）、加納喜光『詩經Ⅰ 戀愛詩と動植物のシンボリズム』『詩經Ⅱ 古代歌謠における愛の表現技法』（ともに二〇〇六年、汲古書院）など、舊來の注によって歪められた原義を本來の形に返すという趣旨に基づくものが大半を占める。

一方で、目加田氏が『詩經研究』において、「今や儒教の經典としての尊嚴を以て詩を解する必要はない」としながらも、疑古派の中心人物であった顧頡剛の『古史辨』第四冊における議論を「或はただ舊説を破壊するのみであり、或は前人の已に言ったことを知らずして新發見として提出

しているものも無くはない。前人の説は細かに讀まねばならぬ<sup>③</sup>」と批判するのは傾聴に値する。ことに文學研究の立場からは、原義研究の方に目が行きがちであって、解釋史研究はとかく敬遠されがちであるが、たとえ原義研究を行うにしても、舊來の注釋が何を主張していたのかを的確に理解しておく必要があることは言うまでもない。しかしそれは「言うは易く行うは難し」であり、まして舊來の注釋自體を研究するために精密に讀み込んでいくのは、まことに地道な作業であって、なおさら困難を伴うことであろう。本書はそうした作業を十數年にわたって續けた成果であり、宋代詩經學研究の專著としては管見の限りわが國で最初のものである<sup>④</sup>。

本書の構成は次の通りである。

はじめに—本研究の概要

第Ⅰ部 歷代詩經學の鳥瞰

第一章 イナゴはどうして嫉妬しないのか？

第二章 妃は夫のために賢者を求めるか？

第二部 北宋詩經學の創始と展開

第三章 歐陽脩『詩本義』の搖籃としての『毛詩正義』

第四章 『詩本義』に見られる歐陽脩の比喩説

第五章 詩の構造的な理解と「詩人の視點」

第六章 蘇轍『詩集傳』と歐陽脩『詩本義』との關係

第七章 蘇轍『詩集傳』と王安石『詩經新義』との關係

第八章 小序に對する蘇轍の認識

第九章 漢唐の詩經學に對する蘇轍の認識

第十章 深讀みの手法

第三部 解釋のレトリック

第十一章 それは本當にあつたことか？

第十二章 一般論として……

第十三章 いかにして詩を作り事と捉えるか？

第十四章 詩を道德の鑑とする者

第十五章 詩人のまなざし、詩人へのまなざし

第十六章 作者の意圖から國史と孔子の解説へ

第四部 儒教倫理と解釋

第十七章 國を捨て新天地をめざすのは不義か？

第十八章 詩によつて過去の君主を刺ることは許される

か？

第十九章 なぜ過去の君子を刺つた詩と解釋してはなら

ないか？

第五部 宋代詩經學の清朝詩經學に對する影響

第二十章 訓詁を綴るもの

まとめ

これだけを見ても本書の浩瀚さは容易に窺えよう。それにもまして目を引くのは、劈頭からいきなり「イナゴはどうして嫉妬しないのか？」で始まり、「それは本當にあつたことか？」「一般論として……」などと續く、およそ中國思想史の研究書らしからぬ型破りな章題である。これだと思わず本書を手にとって開きたくなる誘惑に驅られた讀者諸賢も多いことであろう。最初に突飛なことを言つて相手の注意を引いてから徐ろに本題を述べる諸子百家ばりの説得術に感心させられる。

そうした誘惑に驅られて第一章を開く前に、まずは「はじめに」で述べられている本書の編纂の意圖を確認しておく。

中國の古典、特に儒教の經典において、注釋は經文を讀者がどう理解すべきかを規定する役割を擔っている。『詩經』は「中國最古の詩集、諸國の民謠・朝廷の儀式歌・祭祀歌を集成した詩集」（本書六頁）という「文學的存在としての性格」（同）がまずあり、「もう一方に、五經の一つとして、人間にあるべき道徳を教えるために編纂された」（同）という「道徳的存在としての性格」（同）が混在している。この二つの性格は、當然その注釋にも反映される。即ち注釋を著した學者の文學的な認識と道徳的な認識とが注釋の中に混在しているわけである。そこで「歴代の注釋を比較することによって、それぞれの學者の文學觀・道徳觀を知ることができ、またそれを總合することによって、中國における文學觀・道徳觀の變遷の様子を知ることができると考えられる。」（同）そのためには個別の詩經學者の主張を追うだけではなく、それを「詩經學の流れの中に正

しく定位し、その學術的意義を把握する」（十七頁）ことが必要である。漢唐詩經學の權威と格闘し、その桎梏を脱すべく努力が積み重ねられた北宋の詩經學こそが、こうした問題を考える上で最も重要な研究對象であると著者は考える。

宋代の『詩經』注釋に關する論文はこれまで數多く發表されているが、その大半は個別の注釋を取りあげてその特色を論ずるものであった。それらの研究も無論意義のあるものではあるが、各注釋相互間の關係性についてはあまり論じられず、ともすれば「鹿を逐う者山を見ず」に陥がちである。そこから一步高みへ抜け出さんとした著者の試みは大いに評價に値しよう。しかもそれは決して著者の研究が疎略であることを意味しない。山を見ながら鹿をも逃さない、巨視と微視とを兼ね備えた論證こそが本書の眞骨頂である。

さて本書の第I部は「歴代詩經學の鳥瞰」と題し、その中の第一章は「詩經解釋學史素描」という副題がついてい

て全體の序説のような趣があり、そこで披瀝される方法論も本書全體に貫かれるものであるから、詳しく紹介しよう。

本章は周南「螽斯」とその詩序を例に挙げる。まず「螽斯」を首章のみ挙げると、

螽斯羽　　イナゴの羽が

汎汎兮　　びっしりあつまっている

宜爾子孫　　きつとおまえの子孫も

振振兮　　そのように繁榮するだろう<sup>⑤</sup>

詩序は「螽斯、后妃子孫衆多也。言若螽斯不妒忌、則子孫衆多也。(螽斯は、后妃の子孫衆多なり。言うところは螽斯の若くして妒忌せずんば、則ち子孫衆多なり)」と云う。「イナゴのようには嫉妬しなければ、子孫はたくさん増える」という、生物學的に見れば何とも奇妙なこの説を、後世の學者たちがどう解釋してきたかということが本章の主題である。

漢唐詩經學においては、鄭箋が「イナゴだけは嫉妬せず、おのおの氣を受けて子供を生むことができるのでたくさん

増える」と解するのに對し、『毛詩正義』はこれを「多くの妾たちが文王の夜伽をしておのおの文王から氣を受けて子を生むことができる」と解する。

しかし著者はこれに疑問を呈する。鄭箋が云っているのは「イナゴが交尾せずして天の氣を受け、子を生む」ということではないかと言うのである。著者はその根據としてまず『藝文類聚』卷十五引「螽斯」序の割注に鄭箋を引いて「各得大氣而生子」と云っていることを挙げ、さらに南宋の羅願『爾雅翼』卷二六・釋蟲の「蠶」の項に『列子』『淮南子』『博物志』を引きながら「蜂には雌雄の別がなく自然發生する」と云うことを傍證とする。そして『五經正義』においても「受氣」は「天地の氣を受ける」「親の性質を受け繼ぐ」意で用いられ、先秦漢魏六朝の他の文獻でも「天の氣を受ける」意で用いられることを挙げ、「螽斯」の正義は敢えて「文王から雄の氣を受ける」という苦しい解釋をしていることがわかるとする。さらに著者は、『正義』がこのような無理をしているのは、「イナゴが嫉妬しない」ことは后妃の婦徳をも比喩しているのであり、

もし鄭箋を「イナゴが天の氣を受けて雄なしに子を産む」と解すれば、「后妃も文王なしに子を産む」という史書にも見えない超自然的な出産をしたことになり、詩序が荒唐無稽な説になってしまふからだとする。かくて著者は「このように『正義』は自分の常識に合うように序・傳・箋を故意に曲解している可能性がある」（四二頁）と指摘する。

では北宋におけるこの詩の解釋はどうであろうか。歐陽脩『詩本義』は、『詩經』にうたわれていることも人間の古來不變な道德と人情による常識的な思索で理解できるとする。「人情説」に立ち、イナゴが嫉妬するかどうかは人間にわかることではない以上、鄭箋や正義が「イナゴが嫉妬しない」前提でその理由を詮索するのは無意味であるとす。そして「言若螽斯不妬、忌子孫衆多也」を「言不妬、忌則子孫衆多若螽斯也」と改め、詩序の語順が本來誤つていたのでとする。

著者は歐陽脩のこの解釋が生まれた背景として、「人情説」の他に『詩經』における比喩に對する認識の變化をも擧げる。漢唐詩經學では比喩と比喩される對象は全的な對

應關係を持つが、歐陽脩は比喩と比喩される對象との對應關係は一面面だけでよいと考えた。即ちイナゴの「多産」の面だけが周王朝の繁榮への比喩として用いられているのであり、「嫉妬」云々は詩人の意識に上つていないと考えたのである。こうした意識は詩人でもあつた歐陽脩が『詩經』の修辭や詩作の過程に思いを致して初めて至り得た境地であり、歐陽脩の詩經學は思想的側面と文學的側面とが不可分一體になつたものであると著者は主張する。

だが歐陽脩の批判によつて「イナゴの嫉妬」が詩經學の組上に上らなくなつたわけではなかつた。蘇轍『詩集傳』は螽斯を「嫉妬しなくて子供が多い（不妬而多子）」とし、詩序の説を受け入れた。蘇轍は常識で考えられないような異常や神祕も一概には否定しなかつたのであり、呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』も古人は我々より物の理を細かく觀察していたから、イナゴが嫉妬しないことも知っていたはずだとする。一方、朱熹『詩集傳』は「衆妾」が后妃の婦徳をことほいだものとしながら、イナゴは多産の比喩でしかないとしており、歐陽脩の態度を受け繼いでいる。

このように歐陽脩は序・傳・箋・正義に對する違和感をもとに批判を加えたが、『正義』も序・傳・箋の間の矛盾に對して疏通によつて調整しているわけで、そのスタンスは同じである。兩者の違いは違和感を疏通によつて解消するか、正面から批判するかの違いでしかない。つまり宋代

詩經學の萌芽は『正義』の疏通の中に既に存在していたと著者は主張する。著者に據れば、『毛詩正義』を丹念に讀み解けば、「疏は注を破らず」と言われた中でも獨自の認識を表現していたことを見出せるし、それこそが宋代詩經學へとつながっていく。漢唐詩經學は決して一體ではないし、宋代詩經學もまた漢唐詩經學と斷絶した存在ではなかったのである。

著者はさらに宋代以後にも目を向ける。清朝考證學においては、周知の通り漢學が再び脚光を浴び、『詩經』も詩序や毛傳が復權することになった。陳奐『詩毛氏傳疏』は詩序や毛傳を嚴格に守つた解釋を行っているが、「螽斯」においては詩序の句讀を「言若螽斯。不妬忌則子孫衆多也」と讀み變えれば「妬忌せず」は「螽斯」と無關係にな

るとして、「イナゴの嫉妬」問題を巧妙に回避している。

著者は陳奐のこの説も實は胡承珙『毛詩後箋』が宋末元初の金履祥の説として引いており、歐陽脩をはじめとする宋代詩經學の影響も認められるとする。

續く第二章は周南「卷耳」を例に、漢唐の解釋を宋代詩經學がどのような立場から批判してきたかを分析する。

「卷耳」の詩序は文王の后妃太姪が賢者を求めてその官職を審査し、臣下の勤勞の様子を心配して心が憂えるさまを歌つたものと解するが、歐陽脩は婦人である后妃が賢者を求めて官職を審査することはありませんので詩序の説は誤りとする。蘇轍も同じ理由から、后妃は自ら賢者を求めたのではなく、夫にそうするよう督勵したと解する。

一方朱熹は『詩序辨説』で、詩序のような解釋では、各章にある「我」という一人稱が、首章では后妃の自稱であるのに二章以下では外地に旅する使者の自稱となつて首尾一貫しないから詩序の説は誤りだとする。歐陽脩・蘇轍がともに道德的見地から詩序を批判するのに對し、朱熹は文學的見地から詩序を批判するのである。このように宋代詩



經學は多方面から漢唐詩經學を再檢討し、詩經學を新たな局面に押し上げたのだと著者は言う。

しかし著者はまた言う。宋代詩經學も漢唐詩經學の影響を完全に一掃できたわけではなく、歴史主義的な志向はなお残っている。さらに漢唐詩經學の中でも、毛傳や『正義』は「夫が賢人に官職を與えるのを后妃が輔佐する」としており、宋代詩經學と同様の價值觀で詩序を讀み替えていると。『正義』を他の注釋と比べて初めてこのことに気づいたのであつて、漢唐詩經學と宋代詩經學は「互いに自己主張しながらも切つても切れぬ關係でつながっている」（八三頁）のだと著者は主張する。

一般には朱熹『詩集傳』に代表される宋代詩經學は詩序や傳箋正義への反發から生まれたもので、清朝詩經學は宋學への反發から再び漢唐の古注が見直されることになったと認識されている。一般向けの概説書、たとえば白川靜『詩經』（中公文庫、一九七〇年）や目加田誠『詩經研究』（前掲）はその一章を『詩經』研究史の概説に充てているが、やはりこの認識に立っている。ところが漢唐・宋代・

清朝それぞれの詩經學は從來言われてきたような單純に反發し合う關係にあるのではなく、それぞれ影響を受けながら繼承されていったものであることを、著者は諸注釋そのものを虚心かつ丹念に讀み込むことによつて見出そうとするのである。實に新鮮で、しかも足が地に着いた研究といえよう。

本書の目的とするところや、その研究方法の根幹は、實のところ第一章と第二章で既にほとんど盡くされている。しかし著者は續く第Ⅱ部以下でも、なおさまざまな角度から漢唐・北宋の諸注釋に分析を加え、第一章で示された見通しをより強固なものにしていくのである。

第Ⅱ部第三章から第十章までは、北宋詩經學の主な成果を取りあげて、それぞれが漢唐詩經學、また他の宋代詩經學とどう關係したかを分析する。第三・四章は歐陽脩『詩本義』、第五章は王安石『詩經新義』、第六・九章は蘇轍『詩集傳』、第十章は程頤『詩解』（『河南程書經說』卷三）を對象とする。

第三章は『毛詩正義』が『詩本義』成立にどのような役



割を果たしたかを、両者の比較を通じて次のようにまとめている。

一、考證資料の出典としての役割

二、『詩本義』中の議論との関わり

a、『正義』の説を『詩本義』の議論に取り入れている面

b、『正義』の説を批判することで『詩本義』の議論を構築している面

三、歐陽脩の詩解釋理論の淵源としての影響

歐陽脩は『正義』を排斥したのではなく、寧ろ批判的に吸收・應用したのであり、「六朝唐の義疏學は新しい學問の淵源として存在感を示していた」のだと著者は言う。

第四章は歐陽脩の比喻説を検討する。著者はまず歐陽脩は賦・比・興という傳統的思考にこだわらず、直敘と比喻という二項對立によって『詩經』の修辭技法を分析していたことを指摘する。次いで比喻は作者の意圖を明瞭に表現し、「言い表しがたい思い」を表現するためのものである以上、比喻を解釋すれば詩の意味は簡潔になるはずであっ

て、比喻に教訓を読み取ろうとしてかえって難解になっている傳箋正義は批判されるべきであることが歐陽脩の比喻説の骨子であるとする。

第五章はとかく新法と關連付けて軽く扱われがちな王安石『詩經新義』について、詩の章相互間、句相互間の關係を重視した解釋や、比喻を詩人の實見とする説など、詩人の視點に立った解釋を行っていることを指摘し、王安石自身が詩人であったことがその要因であるとする。

第六―九章は蘇轍『詩集傳』について、その穩健と評される解釋の來源を探る。第六章は蘇轍が歐陽脩からその方法を繼承發展させた事を論じ、第七章では王安石からも詩の構成を重視する方法論を繼承したことを論じ、第八章では蘇轍が小序の首句のみ残して二句目以降を刪つたことについて、二句目以降を無價値と考えたのではなく、首句と二句目以降は性質が異なるものであると考えたためであるとし、第九章では蘇轍が毛傳を『毛詩正義』から切り離してその訓詁だけを利用していることを指摘する。

著者は第七章において、蘇轍は王安石『詩經新義』に對

して批判的ではあったが、司馬光のように深く憎んでいたわけではなかったとする戴維の説を引き、その根拠とされる『宋史』蘇轍傳には確かに司馬光が王安石『新義』を廢して科擧を舊來の制度に戻そうとしたのに對し、蘇轍が性急すぎると反對した旨の記事があるが、これは科擧受験者の混亂を防ぐために現實的配慮を求めたまでであつて、蘇轍自身の『新義』に對する評價に基づくとは言い難い指摘した上で、「蘇轍が『新義』をいかに評價していたかは、『新義』と『蘇傳』の經説を具體的に比較することによつてのみ明らかになるであろう」と云う。ここにも著者の、原典をじかに讀み込むことでその意に近づこうとする態度が窺える。

第十章は程頤『詩解』について、他の北宋の諸注釋と異なり、詩にうたわれる敘事を本事を離れた抽象的な敘述と解釋する傾向が強く、朱熹に「義を取ること太多し」と批判された所以であるが、それは詩を構造的・全體的に理解しようとする態度から來たものであつて、同時代の他の學者と解釋の結果は違つていても、決して孤立したもので

はなく繼承關係が認められることを指摘する。

本章において、著者は程頤の特殊性が高い解釋の例として獨特の字義解釋を挙げ、それらは宋代においては孤立的であつたが、中には基づくところがある例もあることを指摘する。その中で根拠とすべき故訓が見当たらない例として、大雅「皇矣」首章の「憎」を「與增同」と解する例を擧げている。「憎」を「増」と解する故訓は確かに管見の限りでも見當らない。しかし逆に「増」を「憎」に誤つた例なら實は『毛詩正義』の中で指摘されている。魯頌「閟宮」四章「烝徒增增」の正義に「定本・集注皆作増字、其義是也。俗本作憎、誤也（定本・集注は皆な増字に作る、其の義は是なり。俗本憎に作るは、誤りなり）」とあり、程頤がこれに據つて「憎」を「増」と解した可能性は考えられないだろうか。ちなみに『論衡』問孔には「不懼季氏增邑不隱諱之害（季氏の増邑して隱諱せざるの害を懼れず）」という一文があり、この「増」も黃暉『論衡校釋』が「増」當作「憎」、形之訛也」と注して以來これが通説となつている。もしそうであるなら、朱熹が程頤の説を「憎、當作

増」と改めて引用したのも、程頤の訓詁が「閔宮」の正義に基づいたものであることを知っていたか、若しくはそうであろうと推測して改めたことも考えられよう。この例をもって朱熹が「故訓に基づかない程頤の訓釋を自らの詩篇解釋に用いている」（四二三頁）根拠とするのは些か問題があるように思う。

第三部は北宋の各學者を通じての『詩經』研究の方法論や解釋理念を、包括的に論じている。第二部が學者別の縦糸の論であったのに對し、第三部以下はテーマ別の横糸の論であり、恰も『文心雕龍』を思わせる緻密な構成になっている。

第十一章は王風「丘中有麻」を對象として歷代の注釋を比較し、『詩經』解釋における歴史主義の諸相を探る。漢唐詩經學は詩で歌われる内容を特定の歴史上の人物や事件に結びつける傾向が強く、それは『詩經』の外の文献に依據する「文献中心の歴史主義」（四六九頁）であるのに對し、北宋詩經學では『詩經』それ自體が實際に起こったことを歌ったものであり、歴史事實は詩に内在していると考え

「詩經自足型の歴史主義」（四七〇頁）であると指摘する。

さらに清の方玉潤『詩經原始』で一部の詩を作者が頭の中で作った虚構であるとする説が現れ、現代の錢鍾書に至って、詩が登場人物の自作か否か、事實か虚構かといった作詩の事情を顧慮することなく、作品自體と直に向き合い、その趣向や表現自體の面白さを鑑賞すればよいという解釋姿勢が現れたことを、著者は『詩經』研究史上畫期的なことと評價する。錢氏の姿勢は本書における著者の研究姿勢とも共通する故、氣脈を通じるところがあるようだ。

第十二章は歐陽脩以降の各學者が漢唐の歴史主義的解釋からどのように脱却していったかを、歐陽脩『詩本義』以降盛んに用いられる「汎論」「汎言」（一般論）という語を軸に考察する。

第十三章は『毛詩正義』から既に見られる「假設」「假言」（虚構）という術語が、宋代においてどう展開し、變化していったかを論じている。

第十四章は漢唐詩經學に見られる「陳古刺今」の解釋概念から、朱熹『詩集傳』に顯著な淫詩說に至るまでの過程

を分析する。

ところで本章の引用する歐陽脩『詩本義』の「觸事感物文之以言善者美之惡者刺之……」というくだりを、著者が「事に觸れ物に感じそれを言葉に表現し、それによつて善なるものは褒め稱え、惡は刺る氣持ち、(傍點は原文―評者注)を言い、……(觸事感物文之、以言善者美之、惡者刺之、……)」(六四一頁)と讀んでゐるのには少々引つ掛かった。ここはやはり「觸事感物、文之以言、善者美之、惡者刺之(事に觸れ物に感じ、之を文るに言を以てし、善なる者は之を美め、惡なる者は之を刺る)」の方が、リズムからも文意からも自然ではないだろうか。假に著者のように句讀を切るにしても、譯の「氣持ち」に直接對應する文字が引用部分に無いにもかかわらず、わざわざ傍點を振つて強調しているのはいかなものか。

第十五章は『詩經』の作中における語り手や主人公と作者との關係についての分析である。『毛詩正義』では作者は語り手の感情の發露を批評的に敘述する道德的存在とされるのに對し、朱熹は詩中の語り手と詩人を同一視し、語

り手は詩人は藝術的表現者であると同時に道德的存在でもあると考へる。その間にいるのが歐陽脩で、『詩本義』において既に詩人は表現者のまなざしで詩中の出來事を見つめてゐると解する説が見られると著者はいう。

第十六章は嚴粲『詩緝』が、朱熹『詩集傳』で一旦は排された詩序を尊重する方向へ回歸したことについて、詩序を排することによつて『詩經』の道德的意義を詩自體から讀み取らなければならなくなり、かえつて解釋の自由度を狭めてしまつたのに對し、嚴粲は詩序に道德的意義の源泉を戻すことによつて詩自體の自由度を高めることになつたと指摘する。

第四部は第Ⅲ部に續く「横絲の論」で、儒教倫理に關するいくつかのテーマを擧げて、漢唐から宋代に至る解釋の變化を分析する。

第十七章は今いる國を捨てて新天地に移ろうとすることを取つた詩について、漢唐の解釋はそうした態度にも寛容であつたものが、宋代になるとそうした解釋を不道德として批判する傾向が強まることを指摘する。

本章において同姓の臣が國を去ることの是非をめぐる解釋について、著者は『楚辭』九歌・湘君を参考例として擧げる。その中の

心不同兮媒勞　　心同じからざれば媒勞つかれ

恩不甚兮輕絕　　恩甚しからざれば輕がるしく絶ゆ

という句について、王逸注は「自分と主君とは同姓で先祖を同じくするので、主君と交わりを絶つて離れてしまう」とは道義上できない（言己與君同姓共祖、無離絶之義也）」と云うのに對し、『文選』卷三二の李周翰注は「主君に仕える道もこれと似たようなものである（事君之道亦類此焉）」とあつさりした解説であることを指摘する。これを引くのであれば、朱熹の『楚辭集注』もまた「此篇本以求神而不答比事君之不遇、……求神不答、豈不亦猶是乎。（此の篇は本と神を求めて答こたいられざるを以て君に事えて遇せられざるに比す、……神を求めて答こたいられざるは、豈に亦た猶お是くのごとくならんや。」と同様の解釋であることにも觸れておく方が

よいのではないか。君臣關係をめぐる『詩經』の解釋に『楚辭』やその解釋が影響している可能性は十分に考えられることであり、漢唐から北宋への『詩經』解釋の變化も詩經學だけを見ているは解決しない複雑な要素があることを、この例が圖らずも示しているように思う。

第十八章と第十九章は『毛詩正義』に見られる、過去の君主をそしつた詩と解する「追刺」説について考察する。

第十八章では『正義』が「追刺」の概念を用いて詩を解するのは實は本文・序・傳・箋の間の矛盾を解消するための例外的措置であつて、それ故歐陽脩に批判されたが、一方で『正義』が詩人の感情の表出と詩の道德的效用とは必ずしも一致する必要がないと考へていたことが窺へるとする。

第十九章では宋代の各學者に「追刺」説を回避する傾向が強い一方、過去の君主の失敗に起因する亡國の怨みと解する「追怨」「追恨」説が見られることを指摘する。

第V部第二十章では宋代詩經學の清朝學への影響として、陳奐『詩毛氏傳疏』を取りあげる。第一章でも既に觸れられている歐陽脩『詩本義』の陳奐への影響を、字義の考證、

比喩の認識、詩の主題（詩序）と詩句との關係、句構造の把握詩の構造の各方面から詳細に考證する。宋代詩經學が『毛詩正義』を乗り越えようとしながらも、實際にはその影響を受けてきたのと同様に、陳奐もまた宋代詩經學とは異なる體系の學問を構築しようとしながら、その影響を免れ得なかったのだと著者は言う。

第一章の部分でも觸れたように、宋代詩經學と清朝詩經學の間に影響關係を見出したのは著者の大きな功績である。だが宋代詩經學は朱熹『詩集傳』以後、嚴粲『詩緝』で再び尊序に戻る流れの他に、朱熹の淫詩説を一層尖鋭化して、「淫奔者之詩」と朱熹が斷じた詩は聖人の選んだ詩ではあり得ないから刪るべきだと主張した王柏のような流れもある。王柏は『詩經』研究史においては過激派として軽く扱われがちであるが、臺灣の程元敏に『王柏之詩經學』（嘉新水泥公司文化基金會叢書・研究論文第一二六種、一九六八年）という專著があり、程氏は王柏の詩説が明の王陽明、茅坤といった思想家にも影響を残したことを述べている。また目加田誠も同様に王柏の説が「その弟子金仁山（履祥）に

うけ繼がれ、明の王直、王陽明、茅鹿門（坤―評者注）、程篁墩（敏政―評者注）は亦何れも詩經が古の三百篇に非るを主張し、程篁墩に基いて閻若璩も詩經の舊本に非るをとなえた<sup>⑤</sup>と云う。王柏の流れもまた清朝詩經學にまで影響を残したのであれば、その實態は如何なるものであったのか。本書で積み残された大いに氣になる問題である。

ところで本章では王風「采芣」が例に挙げられているが、歐陽脩『詩本義』の解釋について述べている九一三頁末行から九一八頁十二行目に互って詩の本文・訓讀・譯ともに「采」を「采」に作っている。「采」と「采」はもとより別字で、ここは「采」でなければ意味が通らない。著者が凡例で底本として挙げているテキストを確かめたところ、『四部叢刊廣編』本『詩本義』が確かに「采」とも讀めそうな字に作っているが、『詩本義』の底本に従うにしても、ここは「采」に作った上で「底本は「采」に作るが、他の諸本に従い「采」に改める」とでもないかと、讀者を徒らに混亂させるのではないか。實際他の章ではそのように底本の文字を改めているところもある。玉に瑕、それもごく

微細な瑕ではあるが、底本の文字にどこまで忠實であるべきか、特に明白な誤字や一般的でない異體字まで墨守すべきかどうかは、論文を書く上でも學生を指導する上でも悩ましい問題であるので、ここに特記する次第である。

本書はこの後さらに「まとめ」と題して、縷々述べ來たつた個別の論を、より包括的な視點からまとめ直している。第一部を讀んだ後は、第二部より先にこちらを讀んだ方が、本書の全貌が見えやすくなるかも知れない。

第一に擧げるのは『毛詩正義』の重要性である。歐陽脩が唱えた比喻説や、詩篇が「詩人の意」や「編者の意」など重層的で多様な意味をもつという認識、追刺説などの諸説は、『毛詩正義』に既にその萌芽が見られるのであり、『正義』は必ずしも漢代詩經學の化石ではなく、むしろ新しい詩經學を生み養う生命力であつたと著者は言う。

第二に宋代詩經學は漢唐の注釋を素材として用いていることも指摘する。歐陽脩が鄭箋を毛傳から切り離して批判し、蘇轍が毛傳の訓詁を斷章取義して、甚だしきに至つては毛傳と反對の意味の訓詁としたりしているのがそれであ

る。詩序についても蘇轍が首句と二句目を切り離して前者を真正のものとしたのもそれである。

第三に宋代詩經學の學者間にも影響關係があつたことを指摘する。程頤は王安石と政治的には對立關係にあつたが、程頤の詩經研究は王安石と同様に、詩句に極めて濃密な意味が込められているという立場から「深讀み」する傾向があるように、立場が異なる學者の間でも解釋理念や方法には共通する部分があるという。その宋代詩經學の解釋理念について、著者は一つに詩篇の内容は實際に起こつたことであるという解釋は前代から受け繼がれたものであり、歴史主義的解釋は排されても、詩を全くの虚構とは考へなかつたことを指摘し、もう一つに漢唐詩經學は一篇の詩の中でもある章・句・語と他の章・句・語の關係を考慮せず、解釋する傾向が強いが、宋代詩經學では一篇の詩全體の整合性を重視する傾向があることを指摘する。王安石や蘇轍が疊詠の詩について漸層法を用いていると解釋しているのがその例である。

こうした傾向の背景には、詩篇を構想した作者の意圖を



明らかにしようという志向が反映されていると著者はいう。評者はこれに加えて、王逸『楚辭章句』にも漢唐詩經學と同様に、作品全體の一貫性を考慮しない解釋が目立つことを指摘しておきたい。この傾向は屈原を忠臣として顯彰する目的が初めにあったからとされることが多いが、漢代經學ないし「章句の學」全體の傾向としてこの問題を考え直す必要があるかも知れない。

また詩の語り手と作者、さらには編者や注釋者の位相やその相互關係についても深い考察が行われたことも、宋代詩經學の特色として擧げられる。著者はこれらの傾向を「詩篇の構造の解明と論理性の追求とを融合させたもの」と言うことができるだろう」（九七六頁）とまとめている。

以上長々と内容を紹介し、淺學非才を顧みず私見を述べてみたが、やはり先入主を去つて研究對象である諸注釋を直に讀み込み、その結果として從來の教科書的理解を覆すに至ったことは、本書の最も評價すべき點であろう。原典を丁寧な讀むくらしい當然過ぎるほど當然のことだと言う人

もいよう。それはまことに尤もである。だが「目に見える」「役立つ」成果ばかりを求められる今の御時世、當たり前のことを當たり前に行うところが最も困難という倒錯した怪現狀に直面しない人の方が寧ろ稀ではないか。それをものともせず多年に亘つて一つの地道な研究をやり抜いたことはやはり賞讃に値する。

そして著者のもう一つの功績は、『詩經』解釋史という一見無味乾燥でとつきにくい題材を、驚嘆すべき力量とセンスでもつて、かくも魅力的な書物に仕立て上げたことである。正直なところ評者自身も今まで『詩經』解釋史研究がどうにも好きになれなかつたが、本書の第一章を開いて知らず識らずに引き込まれ、氣がついたら思想史研究のみならず文學研究の觀點からも示唆に富む論考に一讀三嘆していたのであつた。評者は大學院生の頃、先輩たちの主宰する朱熹『詩集傳』讀書會に参加していたことがあつた。参考資料として歐陽脩『詩本義』、蘇轍『詩集傳』、呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』に加えて元の劉瑾『詩傳通釋』も用意し、「國風」の部分を読んでいたのであるが、『詩本義』の

古注批判を讀む度に「また屁理屈だ」と皆で笑っていたのを懐かしく思い出した。未熟な院生のこととはいえ、「屁理屈」の中にも興味深い事實が潜んでいることに思い至らなかつた不明を恥じるほかはない。

本書を讀んで氣づくのは、先行研究の引用や参考文献の少なさである。卷末の参考文献一覽を見れば、その絶對數は決して少ないわけではないし、要所要所で歴代の研究をきっちり参照している。とはいえ千ページに及ばんとする大部の研究書にしては、やはり少ないという印象を受ける。だから本書が劣つていと言いたいわけでは勿論ない。漢唐や宋代の諸注釋そのものを虚心に深く讀み込むことによつてこそ、本書は多くの先行研究がなし得なかつた新たな地平に到達しているのである。經文を直に讀み込むことで聖人の意に近づこうとした荻生徂徠の態度にも通じるものがあるといえようか。先行研究に過剰に依存して、いわゆる「銅鐵研究」に陥つてはいないかと思わず自省を促される事實である。

尤も物足りなさを感じた點もないではない。第一章で著

者が「經學研究と文學研究が相分離している現在の狀況を乗り越え、より總合的な視野で中國の古典文化を捉えることができると思う」(六〇頁)と自負するように、本書が北宋詩經學の思想的側面のみならず文學的側面にも注目している點は大いに多とすべきであるが、その文學的側面の源流は『毛詩正義』だけではなく、『文心雕龍』以來の、もつと遡れば他ならぬ『毛詩』大序に始まる文學理論にも求められるはずである。著者の主眼が經學としての北宋詩經學の繼承關係にある以上、あまり多くを求めるべきではないとはいえ、今後に残された課題の一つとはいえよう。それは寧ろ我々文學研究者の側に突きつけられた課題と言ふべきかも知れない。

ついでにもう一つ毛を吹いて疵を求めんことを御寛恕願えれば、假名遣いの統一されていない箇所が散見された<sup>⑪</sup>。論文における書き下し文等の假名遣いについては様々な意見があるかと思うが、評者個人としては、訓點の送り假名まで現代假名遣いにするのはさすがに違和感があるが、書き下し文は現代假名遣いでよいのではないかと思う。

なお本書は事項索引は勿論のこと、本書で組上に載せられた『詩經』各篇と注釋についても、その所在一覽を附している。細やかな配慮といえよう。また本書は二〇一七年に上海古籍出版社から『宋代《詩經》學的繼承與演變』という題で中國語譯も出版されている。

かくて中國思想史の側からボールは投げられた。今そのボールは我々文學研究者の側にある。これからどんな球を投げ返せるだろうか。奮起を促される一冊である。

(研文出版、二〇一七年十月、一〇〇〇頁+引用注釋一覽表  
・引用書名著者名索引三三頁)

註

- ① 松本雅明『詩經諸篇の成立に關する研究』、『松本雅明著作集』第二卷、一九八一年、開明書店(原著一九五八年、東洋文庫)、九四四頁
- ② 目加田誠『定本 詩經譯注(上)』、『目加田誠著作集』第二卷、一九八三年、龍溪書社(原著『詩經・楚辭』、平凡社『中國古典文學全集』所收、一九六〇年)、三七頁
- ③ 目加田誠『詩經研究』、『目加田誠著作集』第一卷、龍溪書社、

一九八五年、一三五頁

④ 漢唐詩經學では大川節尙『三家詩より見たる鄭玄の詩經學』(一九三七年、關書院)がある。

⑤ 本書が引用する『詩經』の詩や原典の譯は、原則として著者の譯に従う。

⑥ 本書が引用する原典の訓讀は原則として著者の訓讀に従い、歴史的假名遣いを現代假名遣いに改める。

⑦ 戴維『詩經研究史』、二〇〇一年、湖南省教育出版社、三〇九頁(本書注に據る)

⑧ 『論語』憲問「文之以禮樂(之を文るに禮樂を以てす)」

⑨ 目加田誠、前掲書、一一五頁

⑩ 理工系の分野で、銅を材料に實驗してある結果が出ると、次は鐵を材料に全く同じ實驗を行うといった、新規性のない研究をいう。研究手法を習得するために必要な面もあるが、研究としての面白さには缺けると認識されている。

⑪ たとえば五四三頁の鄭箋の引用の譯文中に「衷ちゅうふ」(舊假名)と「迷ま」(新假名)が混在している等。